

# 京都府与謝郡伊根町方言の あいさつ表現法について

室 山 敏 昭

## はじめに

近時、あいさつ表現は、談話行動の研究において、最も基本的な単位体をなすものとして改めて注目を集めている。談話行動の研究においては、あいさつ表現を、あいさつ表現行動の構造という観点から捉え、あいさつ表現が対人および状況に応じてどのように連接またはきりかえられていくかという問題、また、典型的な談話行動の目的が知的情報の伝達にあると仮定して、その中で、あいさつ表現が果たす機能は何かという問題などが、主要な課題とされている。

これに対して、方言におけるあいさつ表現法の研究は、表現形式と発想法の特異性において、文表現法における特色ある一分野として早くから注目され、藤原与一氏をはじめとして多くの研究者によって、優れた成果が蓄積されている。しかしながら、それらの研究成果は、一部を除いて文表現レベルの実践にとどまり、<sup>(註1)</sup> それぞれのあいさつ場面において話し手と相手との間に交わされる「呼びかけ $\leftrightarrow$ 受け応え」のきわめて緊密な呼応関係に立つ連文を、切り離しえない談話の単位体として把握しなければならないという認識が、必ずしも十全ではなかったと考えられる。また、特定の方言共時態を対象とする文表現法の研究において、あいさつ表現法が、たとえば命令表現法・判断表現法・感嘆表現法などと同一のレベルにおいて扱われることにも問題が存すると言わなければならない。あいさつ表現法はその他の表現法とは異なり、本来、時間軸と場面軸との交差によって規定される緊密な連文構造体であり、しかも地域社会における人間関係の維持・推進、あるいは社会的コミットメントに重要な機能が存するものである。したがって、あいさつ表現法は、<sup>(註2)</sup> 文を単位とする文法ではなく、談話文法のレベルに位置づけられるべき性格のものであると考える。

このような問題意識のもとに、裏日本方言の古系脈を形成する奥丹後地方方言内の一地である蒲入方言について、まず、話し手と相手との間に交わされるあいさつ表現を「呼びかけ $\leftrightarrow$ 受け応え」の緊密な対応関係からなる談話の最小の単位体として捉え、時間軸と場面軸の交差に即して、体系的に記述することとする。当該方言のあいさつ表現のうち、<sup>(註3)</sup> 表現形式、発想法の上で注目されるものに関しては、広く他地域のそれと比較することによって、方处的特性を明らかにしたいと思う。また、従来、あいさつ表現法については、あいさつ場面による表現形式の固定化・慣習化が強調されてきたが、子細に検討してみると、<sup>(註4)</sup> 社会的コミットメントに機能するあいさつ表現と人間関係の維持・推進に機能するあいさつ表現とは、表現形態のヴァリエントや待遇形式に、明らかに有意差が認められる。そこで、「場面待遇のヴァリエント」に焦点を当てて分析、検討を施すこととする。

さらに、当該方言のあいさつ表現法の様態を踏まえ、あいさつ表現行動の観点から、あいさつ表現研究のための概括的な見取り図を示してみたいと考える。

なお、対象方言として取り上げる蒲入集落は、丹後半島の北東部に位置する典型的な漁業集落であり、成人男性の大半が漁業に従事している。女性が漁業に従事することは全くなく、その点で古い時代の漁業形態をとどめていると言ってよい。当該集落でのあいさつ表現法の調査は、昭和43年と58年の二度にわたって行ったが、自然傍受法による調査を主としたため、あいさつ表現法の変容については、統一的な基準によって確認することができない。したがって、その点に関しては、あえて触れないこととする。

## 一 あいさつ表現における時間と場面

日常一般の方言談話の生活を見ると、日々の対人接触の都度都度の、その初めと終わりに、決まってあいさつが交わされる。これは、地域社会の成員が、共同体の中での人間関係を尊重し、複雑な人間関係のネットワークを維持・推進していこうとする意識に基づく、習慣的な営みであると解することができる。また、典型的な言語行動の目的が、知的情報の伝達にあると仮定して、その談話の前後にあいさつが行われることを考えると、これが用件にあたる知的情報を円滑に伝えるためのいわば情的なクッション部分としての機能を担っていることを示すものに外ならないと考えられる。このような社会的機能を担うあいさつにおいて用いられる表現があいさつ表現であり、これは、人々の日々の生活場面に即して特定習慣的な形式が交わされることを基本とするものである。朝の途上での出会いには、それにふさわしいあいさつ表現があり、夕食時分の他家訪問には、それなりのあいさつ表現がある。こうして、人々の生活場面に即して、あいさつ表現の枠組を設定することができる。

人々の生活場面は複雑多岐にわたるが、あいさつ表現を中心に据えて考えた場合、その生活場面は、まず大きく、二系列に見分けられる。日常平時の生活場面と特殊特定時の生活場面とである。朝・夕の出会いや訪問、労働、買い物などは前者に属し、盆・正月、冠・婚・葬・祭などは後者に属する。生活場面を広義に解すれば、時間はおのずからその中に包摂されることになるが、あいさつ表現の場面が、基本的に時間軸を前提として成り立つ点に注目して、以下の記述においては時間軸を優先して扱うこととする。なお、小林祐子氏も、あいさつ交換が行われる時刻を重視し、「制限的」と「非制限的」とに二分している。<sup>(注7)</sup>

## 二 蒲入方言における日常平時のあいさつ表現の様態

日常平時のあいさつ表現も、使用される時間帯が当該方言社会の生活時間に即してほぼ一定している「時間的な制約を前提とするもの」と、一定していない「時間的な制約を前提としないもの」の二系列に見分けられる。朝・日中・晩のあいさつ表現などは前者における最も典型的なものであり、買い物時のあいさつ表現や感謝のあいさつ表現などは後者の典型的な例とされる。また、労働のあいさつ表現は、朝・日中・晩のあいさつ表現ほどではないにしても、その基本的なものは、時間的な制約を前提として用いられることが多いと言ってよいであろう。

(一) 時間的な制約を前提とするもの

1. 朝のあいさつ表現

④ a. 朝の途上出会いのあいさつ表現

当該方言社会における老年層男女のあいさつの生活は、次のような朝のあいさつ表現のやりとりによって始められる。

○オハヨーゴザンス。お早うございます。(老女→老男)

○へー。オハヨーゴザンス。へえ。お早うございます。(老男→老女)

「オハヨー。」で言いとめないで、「ゴザンス」という丁寧形式を用いているところに、いかに老年層のもの言らしい慇懃さがよくうかがわれる。「ゴザンス」は、すでに40歳以下の男女の言語感覚にはそぐわないことばになっているという。

さて、当該方言における受け応えのあいさつ表現は、朝のあいさつ表現に限らず、全般に「へー。」で始まることが多い。まず、「へー。」と応じたところに、当初は謙遜の情が露に表明されたであろうが、「へー。」で応じる表現形式が固定化・慣習化するに及んで、今日では、もはや相手中心の受け応えの気分は、感得されがたくなっている。「へー。」の後には長めのポーズが認められ、全体がおおむね高平調に発音される。飯豊毅一氏の報告によると、福島県下にあっても、早朝の途上出会いのあいさつ場面において、

○ハイえ。ナイ。

○アイ。おめーモ。ハイえ。ナイ。

のように、「受け応え」の表現形式が「ハイ。」または「アイ。」で始まる慣習が強く認められるということである。蒲入方言の場合も福島県下の場合も、ともに相手の呼びかけのあいさつ表現を相手中心に確認した上で応じるといふ、対者中心の発想によって生成された談話形式であると言ってよからう。

老年男子の朝のあいさつ表現には、この他に、

○オハヨーゴザス。お早うございます。(老男→老男)

○へー。オハヨーゴザス。へえ。お早うございます。(老男→老男)

や、

○オハヨーガス。お早うございます。(老男→老男)

○へー。オハヨーガス。へえ。お早うございます。(老男→老男)

の表現形式が用いられることも少なくない。特に親しい間柄においては、「ガス」を用いる形式がよく行われている。

中年層以下の男性は、

○ハヤー。ワナー。早いねえ。(中男→中男)

○へー。ハヤー。ワナー。へえ。早いねえ。(中男→中男)

の談話形式を用いることが多く、女性は、

○オハヨース。お早うございます。(中女→中女)

○へー。オハヨース。へえ。お早うございます。(中女→中女)

とか、

○オハヨーゴザイマス。お早うございます。(中女→中女)

○へー。オハヨーゴザイマス。へえ。お早うございます。(中女→中女)

の言い方を行うことが多い。後者は、改まり意識の強く認められるものであり、親しい間柄においては前者の言い方が交わされることが多い。

また、少年層においては、

○オッス。お早う。(少男→少男)

○オッス。お早う。(少男→少男)

のやりとりがよく聞かれ、待遇形式をとらないことが特徴的である。

中年層男子が用いる「ハヤー ワナー。」は、親しい間柄でのくだけたあいさつ表現であるが、これだけが接辞の「オ」をとらず、「オハヨー」形式のものとは、大きく趣を異にしている。朝の早い時刻を相互に確認し合うという素朴な発想が、この種の早朝出合いのあいさつ表現を生み出したものと考えられる。このような発想を生み出した背景には、午前5時には出漁するためそらって港へ向かうという漁業社会独自の生活時間が存していると推定される。また、「オハヨース。」の言い方は、広く奥丹後地方の全域に認められ、しかも、もっぱら女性が用いるところから、京都市をはじめ京都府下に盛んな「オハヨーオス。」から変化したものと考えられる。ただ、「オハヨース。」の表現形式が、主に中年女性に用いられることから、この表現形式が成立したのは、さほど古いこととは思われない。

ところで、当該方言はもとより、奥丹後地方から島根県の出雲地方に及ぶ広い地域においては、山口県下や広島県の安芸地方に盛んな「オハヨーアリマシタ。」「オハヨーガンシタ。」のような完了法の「タ」どめにする習慣が、全く認められない。ここに、山陰方言と山陽方言の地域差があらわである。山陰方言に、なぜ完了法の「タ」どめにする習慣が成立しなかったかといえ、ば、「オハヨーゴザンス。」という現在形終止の形式以外に、「オハヨーゴザンシテ。」「オハヨーゴザイマシテ。」という連用中止法による、より丁寧な表現形式に対する指向性が強く働いたからだと考えられる。

#### b. 朝の他家訪問のあいさつ表現

○オハヨーゴザンス。お早うございます。(老女→老女)

○へー。オハヨーゴザンス。へえ。お早うございます。(老女→老女)

これが、一般に行われる言い方で、途上出合いのあいさつ表現と表現形式が同一である。また、訪問先の家人と疎遠な間柄にある場合には、

○アサ トーカラ ゴメンナサレテ オクンナハレー。朝早くからごめんなさって下さいませ。(老女→家人)

○へー。オイデナハリマシヨー。へえ。おいでなさいませ。(老男→老女)

という、格段に改まった、しかも古態の対話が交わされる。特に、訪問を受けた側が、未来法による一段と丁寧な言い方を用いて応じているのは、『ロドリゲス日本大文典』に「敬語の動詞を使って尊敬すべき人と話すには、本来の命令法よりも未来の言い方をした方が一段と高い敬意と丁寧さを示す事になる」(土井忠生氏訳, p. 59)とある説明に通り事実として注目される。

一方、ごく親しい間柄にあっては、

○サメタ カナー。目がさめたかねえ。(老男→家人)

○ヘー。サメトツ<sup>↑</sup>ゼ。へえ。さめてるよ。(家人→老男)

のような言い方がよく行われる。秋田・山形・宮城・福島各県に、「ハイッター。」(入るよの意)の言い方が盛んである状況に照らして、「サメタ カナー。」という言い方は、互いによく知り合った狭い地域社会内での人々の日常的行動がそのまま現れた、訪問時の原初的な表現ではないかと考えられる。なお、戦前までは、「サメタ カナー。」の言い方が、老年層男性の間で早朝の途上出合いのあいさつ表現としても用いられていたということである。これは、当該方言に、かつては、島根県隠岐島五箇村方言に近似する状況や鹿<sup>(註10)</sup>児島県西南部方言にも通り状況が<sup>(註11)</sup>存したことを示す事実として注目される。このように、「朝の他家訪問のあいさつ表現」において、親疎のいずれの場合にあっても、古風な発想や表現形式が併存しているのは、当該方言の方言基質の特性を明示するものとして、注目されるのである。

## 2. 朝の労働のあいさつ表現

○エリヤー 下ーカラ セー デアートンナハル ナー。大層早くから精を出していなさるねえ。(中女→中女)

○アಂತアモー、ハヨー キナハッタ ナー。あなたも早くいらっしやいましたねえ。  
(中女→中女)

の言い方がよく慣習化している。また、あまりに早くからの仕事始めに対しては、

○アイヤ マー。モー ヤットンナハー ダカエ。あれまあ。もう始めていなさるの。  
(老女→老女)

○ヘー。ヤットリマス デ。へえ。やってますよ。(老女→老女)

のやりとりが聞かれ、自らの心情を素直に吐露した表現となっている。また、朝の早い時間に、仕事に向かう土地人同士が、途上出会って交わすあいさつ談話には、

○ウミー イク ダカー。海へ行くのか。(中男→中男)

○イチー。オミヤー ワー。いいや。お前は。(中男→中男)

とか、

○ヤマー イク ダカナー。山へ行くのかね。(中男→老女)

○ヘー。オミヤーワー。へえ。お前は。(老女→中男)

のように、行先を尋ねる言い方が多用される。しかし、これらのあいさつ談話における発話意図が、行先の確認にあるのではなく、相互に社会的なコミットメントを交わす点に存することは言うまでもない。これらのあいさつ談話において、男性に対しては「ウミ」(海)、女性に対しては「ヤマ」(山)と、行先を具体的に提示しているのは、この地の労働が、男性は漁、女性は山仕事とほぼ決まっているからである。また、この種のあいさつ談話において、「オミヤーワー」と相手の行動に言及する形式が慣習化しているのは、当該社会における濃密な人間関係をベースとするものと解される。

## 3. 日中のあいさつ表現

日中のあいさつ表現で、最も一般的なものは、

○コンニチワ。こんにちは。(中女→中女)

○ヘー。ヨニチワ。へえ。こんにちは。(中女→中女)

の言い方である。親疎の別とは特に関係なく、よく取り交わされるものである。

ところが、当該方言をはじめとして、奥丹後地方においては、古老や老年層のもの言い、次のような言い方が今日もかなりよく行われている。

○ヨニチワ オアツーゴザンス。こんにちはお暑うございます。(老女→老女)

○ヘー。ヨニチワ オアツーゴザンス。へえ。こんにちはお暑うございます。(老女→老女)

話部アクセントも「ヨニチワ」となっており、述話部を予定する主話部の構えが、明確に認められる。この実内容を顕在化させた言い方は、待遇品位も高く、やや改まったもの言いとなる。しかし、この言い方が、たとえば結婚式などの公的場面に限って用いられるという著しい場面的制約を見せず、日中のあいさつ表現に用いられているところに、当該方言の古態性の一斑を見ることが出来る。一方、ごく親しい間柄においては、

○コンチワ。こんにちは。(青男→青男)

○コンチワ。こんにちは。(青男→青男)

の対話形式が盛んである。

これらの一般的なあいさつ表現とは別に、天候のことが話題とされることも多い。天候の順・不順が、土地人の生活そのことに直接的に関わってくるからである。寒暑が話題とされ、晴雨が話題とされる。

○オアツーゴザス。お暑うございます。(老男→老男)

○ヘー。オアツーゴザス。へえ。お暑うございます。(老男→老男)

○サムーゴザンス。寒うございます。(老女→中女)

○ヘー。オサムーゴザンス。へえ。お寒うございます。(中女→老女)

○キョーワ ヨー フル ナー。今日はよく降るねえ。(老女→老女)

○ヘー。キョーワ ホンニ ヨー フル ナーア。へえ。今日は本当によく降るねえ。  
(老女→老女)

また、当該集落が漁業集落であるため、風が話題とされることも多い。

○キョーワ カゼガ ガイニ トブ ナー。今日は風が大層強く吹くねえ。(中男→中男)

○ホンニ ガイニ トブ ナー。本当に大層強く吹くねえ。(中男→中男)

#### 4. 夕方近くの労働のあいさつ表現

朝の労働のあいさつ表現においては、朝早くから労働に取り組む相手の働きぶりを讃え、励ます発想に基づく表現形式をとるものがその基本に認められた。これは、次のあいさつ談話からも分かるように、日中の場合においても同様である。

○オニローゴザンジョー。大変でございましょう。(老女→老女)

○ヘー。オマエモー。へえ。あんたさんも。(老女→老女)

しかし、外で働く時間にはおのずから限度というものがある、それが、当該集落の成員の共通認識となっている。したがって、夕暮れ近くになると、田畑では、

○イアー カナー。帰ろうかねえ（仕事を終えようかねえ）。（老女→老女）

○へー。イアー。へえ。帰ろう。（老女→老女）

といったあいさつ表現が交わされ、誘い合って家路につく。これが、当該方言に最も一般的に行われている。また、漁に出ている男性は、

○オィ、イアー カー。おい、帰ろうか。（中男→中男）

○オー、イアー。おう、帰ろう。（中男→中男）

のように言っ、誘い合って帰路につく。

以上のような「イノー」を用いる言い方とともに、「シマオー」を用いる表現も認められる。「イノー」に比べて、多少改まった表現という意識を伴う。

○モー シマオー ナー。もう終えようね。（老女→中女）

○へー。シマイマス デ。へえ。終えますよ。（中女→老女）

### 5. 夕食時分の他家訪問のあいさつ表現

この場面において、親しい土地人同士の間で交わされる最も普通のあいさつ談話は、

○オジシヤーナ。夕食はお済みですか。（老男→家人）

○へー。オジシヤーナ。へえ。すませました。（家人→老男）

の言い方で、これは、中年層以上の男女のもの言いに行われることが多いものである。「呼びかけ→受け応え」の表現形式の緊密な呼応関係が、このあいさつ表現の慣用度の高さをよく示していると言っよかろう。多少とも気のはる間柄においては、

○シマイナハッタ カナ。夕食はお済みになりましたかね。（老男→家人）

○へー。シマイマシタ ダデー。へえ。すませましたよ。（家人→老男）

のように、「ナハル→マス」の待遇形式を用いたより丁寧なもの言いが交わされ、さらに、目上・年長の人に対しては、

○オジシヤーナハッタ カナ。夕食はお済みになりましたかね。（中女→家人）

○へー。オジシヤーナ。へえ。すませました。（家人→中女）

の言い方が行われる。以上のような「シマウ」を用いる言い方とは別に、中年層・青年層においては、「アガル」を用いる形式がかなり盛んである。「シマウ」から「アガル」への変化が緩やかに進んでいると見なすことができる。中年層は、「シマウ」の言い方も用いるので、老・中・青の各年層と「シマウ」「アガル」との関係は、表1のように示すことができる。

老年層	中年層	青年層	表1 →	老年層	中年層	青年層	表2
	アガル	アガル		シマウ	アガル	アガル	
シマウ	シマウ						

ここで、中年層が併用している「シマウ」「アガル」両形のうち、土地人の説明によると、「シマウ」の方がやや劣勢とのことだから、今後、表2のように変化することが予想される。その変化がさらに進み、老年層も「アガル」を専用するようになった際、夕食時

分の他家訪問のあいさつ表現として、今日最も一般的な「オンミャーナ。」の形式が、同時に消滅することになるのか、それとも完全に形態化した形で使用され続けるのか興味を持たれるところである。

○オアガリナ。夕食はおすみ。(青女→家人)

○ヘー。オアガリナ。へえ。すませました。(家人→青女)

夕方の訪問のあいさつ表現において、食事をたてにとる発想法は、西日本を中心として全国的に行われている。たとえば、広島県下では、次のように多様な形式が認められる。

○オンマイチ。〔広島県高田郡美土里町〕

○オアガンサンシタ カ。〔広島市東区中山町〕

○ゴジュブンデス カ。〔広島県生口島〕

また、三重県鈴鹿市では、

○ゴジブンドキニ スンマセン ナー。マー ヌックリ アガットクナハレ。

のように、食事時分に訪れたことを気づかうふうのもの言いも行われている。かつて、地域社会にあっては、昼間は家族総出の労働に中心がおかれた関係で、特に夕方から晩にかけてが、近所づきあいのころあいとなり、それゆえ、自然に夕食時分に他家を訪問することが多くなり、「食事」をたてにとる発想法と表現形式が栄えることになったと考えられる。

#### 6. 晩の途上出合いのあいさつ表現

この場面での、老年層男女のあいさつ談話は、

○バンナリマシタ ナー。今晚は。(老女→老女)

○ヘー。バンナリマシタ ナー。へえ。今晚は。(老女→老女)

のやりとりが、最も普通に行われている。共通語などの「今晚は。」とは違って、実内容提示の表現形式をとっているが、東北地方の「オバン」「オバンダ ナス。」とは、いささか趣を異にする点が注目される。東北地方のものは、「オ晩」と体言を中心にしたもの言い、いわば「晩」そのものを祝福する気分が強いものに対して、当該方言の「晩ナリマシタ ナー。」は、時間の推移を表す複合動詞を用いることによって、晩が訪れたことを祝福する気分のもの言いになっている。

○コンバンワ。今晚は。(中男→中男)

○ヘー。コンバンワ。へえ。今晚は。(中男→中男)

の言い方は、老年層から少年層までひろく聞かれる。また、漁業集落という社会的特性を反映して、次のようなあいさつ表現を行うことも少なくない。

○エー ナギデ ヨース ナーア。いい皿でいいですねえ。(老男→老男)

○ヘー。ソース ナーア。へえ。そうですねえ。(老男→老男)

#### 7. 午後9時過ぎ訪問先を辞去する際のあいさつ表現

○サヨナラ アンタ。さようなら。(老女→家人)

○ヘー。サヨナラ。へえ。さようなら。(家人→老女)

親しい間柄において、最も普通に用いられる辞去のあいさつ表現がこれである。多少疎

遠な間柄においては、

○オアーマデ ジャマシテ スンマヘ<sup>↑</sup>テンダ ナーア。遅くまでお邪魔をすすみませんでしたねえ。(中女→家人)

○サヨナラ。ゴクローサンデ アリマシタ。さようなら。御苦労さんでございました。(家人→中女)

のあいさつ表現が交わされる。「～デ アリマス」の丁寧表現は、ほとんどがあいさつ表現の中で用いられると言ってよい。なお、当該集落においては、月に二度集会が開かれるが、終わるのが遅くなって会場を辞去する際には、老年層男女は、普通、

○ヘー。ドナタサンモ。へえ。どなたさんも。(老女→老女数人)

○キー ツケテ インナハレー。気をつけてお帰りなさい。(老女数人→老女)  
のあいさつ表現を取り交わすことが多い。

以上が、「日常平時のあいさつ表現」のうち、「時間的な制約を前提とするもの」の基本的なあいさつ場面における談話の諸相である。当該社会の人々は、今まで見てきたような生活時間に基づいて、場面場面に適合したあいさつの生活を営んでいる。すなわち、日常平時のあいさつ表現は、基本的には、当該社会の生活時間を軸として、「途上出合い」「労働」「訪問」「辞去」「食事」などの場面ごとに、「呼びかけ←→受け応え」の連文構造からなるあいさつ表現が交わされ、その発想法や表現形式、あるいは待遇形式などの現れには、話し手と相手との親疎関係、年齢関係、男女関係などによってヴァリエントが認められる。あいさつ表現の発話意図は、「関係認知」「祝福」「労い」「感謝」「詫び」などが中心であるが、その根底には、多く、人間関係の維持・推進への寄与に対する指向が強く働いていると見なされる。

以下には、日常平時のあいさつ表現のうち、「時間的な制約を前提としないもの」について、簡単に見ていくこととする。

(⇒ 時間的な制約を前提としないもの)

### 1. 買い物時のあいさつ表現

少年層の男女は、店の人が傍にいる場合にもいない場合にも、普通、

○コレー。これを。(少男→店の人)

の言い方をする。青年層・中年層の男性は、店の人が傍にいる場合には、

○コレ オクレ。これをおくれ。(青男→店の人)

のように言うが、見当たらない場合には、

○マイドサン。毎度、今日は。(中男→店の人)

と言って、奥へ向けて声をかける。この言い方は、福井県下をはじめ北陸地方一帯にかなり盛んなものである。また、老年層男性は、普通、

○ゴメン。ごめん。(老男→店の人)

の言い方を用いる。これに対して、中年層・老年層の女性は、店の人が傍にいる場合、

○コレー オクンナハレ。これを下さい。(老女→店の人)

のように、「オクンナハレ」という待遇形式を用いることが一般的である。

## 2. 物ももらった時の感謝のあいさつ表現

親しい間柄においては、一般に、

○へー。○ーキニ。へえ。ありがとう。(老女→老女)

○へー。○ッケニ。へえ。ありがとう。(中男→中男)

のようなあいさつ表現が行われるが、やや丁寧に言おうとする場合には、

○へー。○ーキニ アンタ。へえ。ありがとう。(中女→中女)

のように、文末詞の「アンタ」を添えた言い方が用いられる。「オーキニ」「オーケニ」は、特に近畿地方に盛んな感謝のあいさつ表現だが、山陰地方においても、奥丹後地方から鳥取県の中部地方にかけて、盛んに行われている。

さて、蒲入方言における感謝のあいさつ表現の特色は、常に「へー。」という応答が先行文になるということである。しかし、これも謝辞の前に、物を渡す側のあいさつ表現があることを考えれば、当該方言のあいさつ表現としては、合自然なことである。やや改まった場面においては、

○へー。○ーケニ スンマセ<sup>ン</sup>。へえ。おおきにすみません。(老女→老女)

○へー。○ーケニ アリガト<sup>ー</sup>。へえ。おおきにありがとう。(中女→中女)

のように、実内容顕在化の表現形式を多用する。「スンマセン」は、本来、詫びの言い方であるため、感謝を表す「アリガト<sup>ー</sup>」よりも、丁寧なもの言いと意識されている。青年層男女の年長者に対する感謝のあいさつ表現は、普通、

○ーキニ アリガト<sup>ー</sup>ゴザイマ<sup>ス</sup>。おおきにありがとうございます。(青女→老女)  
のように、「アリガト<sup>ー</sup>ゴザイマス」の待遇形式が用いられる。

以上が、当該方言に行われる、「時間的な制約を前提としないあいさつ表現」のうちの主なものである。

### 三 蒲入方言のあいさつ表現法の特色

以上見てきたものが、当該方言における「日常平時のあいさつ表現」の基本的なものであり、あいさつ表現法の枠組を形成するものである。

さて、当該方言のあいさつ表現法を、生活時間の慣習、対話形式・表現形式の地域性、表現要素の特色の各視点から見ると、特に次に記すような事実が目される。

1. 「呼びかけ→受け応え」から成る談話の最小単位として、対話形式・表現形式の一体性が特に強く認められるものが、朝・日中・晩の途上出合いのあいさつ表現であることは、都市・地方の別を問わない事実である。しかし、「夕食時分の他家訪問のあいさつ表現」において、対話形式・表現形式の顕著な一体性が認められることから、他家訪問の習慣が、海や山での一日の労働を終えて皆がくつろぐ夕刻時分であったことが分かる。

2. 「受け応え」のあいさつ表現が、大半、「へー。」という応答文で始められるが、この対話形式が、福島県下にも共通して認められる事実が目される。また、「朝の他家訪問のあいさつ表現」において、「サメタ カナー。」と「サメタ」を用いる表現形式、あるいは訪問を受けた側の「へー。オイデナハリマシヨ<sup>ー</sup>。」という未来化表現

法、さらに「日中の途上出合いのあいさつ表現」において、「コンニチワ オアツゴザンス。」と実内容を顕在化させる表現形式などは、いずれも、古態性、原初性を思わせるものである。特に、「サメタ」という表現形式は、鳥根県隠岐島方言や鹿児島県西南部方言との連関性を示すものとして、注目される。また、「朝の途上出合いのあいさつ表現」における「オハヨーゴザンシテ。」という連用中止法の形式は、鳥根県出雲地方まで山陰に盛んに行われるものであり、「晩の途上出合いのあいさつ表現」における「バンナリマシタ ナー。」は、鳥取県の中部地方まで最も一般的な成人のあいさつ表現とされるものである。これに対して、「買い物時のあいさつ表現」における「マイドサン。」は、北陸方言に通う表現形式である。さらに、あいさつ表現における待遇要素を見てみると、「ナサレル」「ナル」「ゴザンス・ゴザス・ガス」などの山陰方言に通うものと、「オス」「オクンナハル」などの京都府下に著しいものとの併存が認められる。このように、当該方言のあいさつ表現法は、山陰方言色をベースとしながら、一方で近畿方言、北陸方言に連なる性格を見せ、さらには東北方言、九州西南部方言に通う古態性をもうかがわせ、きわめて複雑な系派的特性を示すものである。

3. 「朝の途上出合いのあいさつ表現」において、「ハヤ ワナー。」のように、朝の早い時刻をことさらに確認し合う表現形式を用いて、話し手と相手とが相互にコミットし合う発想の背景には、当該集落の漁業社会としての生活時間の始まりの早さということが想定される。これに類した、あいさつ表現に見られる社会的環境の反映として、「朝の途上出合いのあいさつ表現」における「ウミー イク ダカー。」のような言い方や、特定の時刻とは関係なく「風」のことを話題にすることが多いといった事実を指摘することができる。

#### 四 蒲入方言のあいさつ表現法における場面待遇のヴァリエント

あいさつ表現における表現形式のヴァリエントの分析を行ったものとして、真田信治氏の研究がある。富山県の西部、砺波市の郊外で、「訪問の場面」に限定し、使用される場所・人間関係を規定して、60名のインフォーマントについて調査を行い、その結果を詳しく分析し、考察を加えたものである。この研究によって解明された事実の一つとして、「場面が<疎>の度合を強めれば強めるほど、ヴァリエントが少なくなり、定型化した表現が用いられる」ということがある。しかし、真田氏の研究においては、あいさつ場面が「訪問の場面」に限られているため、あいさつ場面の相違とヴァリエントとの関係が不明である。

ところが、当該方言における一々のあいさつ場面を見てみると、年齢関係や親疎関係、さらには性差によって、表現形式にヴァリエントが認められ、しかも、それは、あいさつ場面によって、様様ではないように思われる。そこで、以下には、話し手と相手との社会的認知の合図を表す「途上出合いのあいさつ」と、相互の人間関係の維持・推進への寄与を指向する「他家訪問のあいさつ」という二つのあいさつ場面について、「表現形式のヴァリエント」と「場面待遇のヴァリエント」（年齢関係や親疎関係が要因となって形成される待遇形式のヴァリエント）の現れ方と親疎関係・性差との間に、どのような関係が見出されるか、検討を施してみることとする。ただし、筆者の調査は、自然傍受法を主とし

ており、しかも、親疎関係も当該社会におけるそれに限られるため、分析結果はあくまでも相対的な性格のものにとどまる。また、分析の対象は、最も多くの資料が得られている老年層とし、先に示した資料で一部割愛したものも含めることとする。なお、表3の各場面の最後に〔 〕つきで記している数字は、前者が「場面待遇のヴァリエント」数を、後者が文の平均拍数をそれぞれ表す。また、親疎関係の判定、性差については、土地の初老男性2名の検閲を得ている。

(表3)

場面	疎	遠	親	密
途 上 出 会 い の 場 面	①オハヨーゴザンシテ ナー。(男女とも) ②オハヨーゴザス。(男) ③コンニチワ オアツゴザンス。(男女とも) ④オアツゴザス。(男) ⑤オアツゴザンス。(男女とも) ⑥オサムゴザンス。(男女とも) ⑦キョーワ エー ヒヨリデ ヨーゴザンス ナーア。(男女とも) ⑧エー ナギデ ヨース ナーア。(女) ⑨ホンニ ヨー フリマス ナー。(男女とも) ⑩パンナリマシタ ナー。(男女とも) ⑪パンナリマシテ ナー。(男女とも)		①オハヨーゴザンス。(男女とも) ②オハヨー。(男女とも) ③ハヤー ワナ。(男) ④ウミー イク ダカー。(男女とも) ⑤ヤマー イク ダカー。(男女とも) ⑥コンニチワ。(男女とも) ⑦コンチワ。(男) ⑧アツゴザンス。(男女とも) ⑨サムゴザンス。(男女とも) ⑩エー ナギダ ナー。(男女とも) ⑪ヨー フル ナー。(男女とも) ⑫コンバンワ。(男女とも)	
				[6] [11. 1] [3] [6. 3]
訪 問 の 場 面	①アサ トーカラ ゴメンナサレテ オクンナハレー。(男女とも) ②オハヨーゴザンシテ ナー。(男女とも) ③オハヨーゴザンス。(男女とも) ④オハヨーゴザス。(男) ⑤オシマイナハンシタ カナ。(女) ⑥オシマイナハッタ カナ。(女) ⑦モー シマイナハッタ カナー。(男女とも) ⑧ドーゾ エンリョセット タベテ オクンナハレー。(女) ⑨オソーナッテカラ オジャマシテ スンマヘン ナー。(女)		①オキトンナッ ダカナ。(男女とも) ②サメタ カナー。(男) ③オハヨー。(男) ④オハヨーゴザンス。(女) ⑤オシマエーナ。(男女とも) ⑥スندا カナー。(男女とも) ⑦ハヨー アガンナンセー。(男女とも) ⑧オソーナッテカラ ジャマンテ スマン ナー。	
				[8] [14. 2] [6] [8. 9]

表3から、およそ次のようなことを読みとることができる。

1. 疎遠な人間関係と親密な人間関係との間で、あいさつ表現のヴァリエーション数にほとんど差異を見出すことができない。
2. しかし、場面待遇のヴァリエーション（待遇要素）においては、両者の間にかなり大きな差異を認めることができ、どちらのあいさつ場面においても、疎遠な人間関係の方が多くなっている。
3. どちらのあいさつ場面においても、疎遠な人間関係の文の平均拍数がかなり多くなっている。
4. 「途上出合いのあいさつ場面」と「訪問のあいさつ場面」とを比較すると、「訪問のあいさつ場面」の方が、表現形式のヴァリエーション数は親疎ともに少ないにもかかわらず、疎遠な人間関係において、場面待遇のヴァリエーション数は2、一文の拍数は3.1多くなっている。この事実には、二つのあいさつ場面が担っている社会的機能の相違を、反映するものと考えることができる。別の表現を用いるならば、二つのあいさつ場面においては、相手への顧慮の程度差がかなり明確に認められるということである。
5. どちらのあいさつ場面においても、女性の方がより丁寧な言い方を用いる。

ところで、当該方言に認められる、「話し手と相手との人間関係の維持・推進への寄与を指向するあいさつ表現は、相互の社会関係認知の合図を示すあいさつ表現に比べて、より待遇度の高い言い方を要求する」という事実は、他の方言にも同様に認められることであろうか。もし、他の方言にも同様に認められることが明らかになれば、あいさつ表現における二種の社会的機能と待遇形式の多様性・一文の平均拍数との間には明確な相関性が存することを検証しうることになる。そこで、藤木敦氏の「島根県仁多郡横田町中村方言のあいさつことば」(老年層男女のあいさつ表現に限定して記述したもの)の中から、「朝のあいさつことば」<sup>(註15)</sup>と「辞去のあいさつことば」の二つを取り上げて、例文数・場面待遇のヴァリエーション・一文の平均拍数を求めると、表4のようになる。

(表4)

場面	例文数	場面待遇のヴァリエーション	文の拍数
朝のあいさつ	3	① サッシャエス ② ゴザエマス ③ マス ④ オ・・・サン 4	17.3
辞去のあいさつ	4	① ナサエマス ② ナサエス ③ クダサエス ④ ゴザエマス ⑤ マス ⑥ オ ⑦ ゴ・・・サン 7	28.0

表4から、中村方言においても、あいさつ表現の二種の社会的機能と待遇度の差異との

相関性は、きわめて高いことが指摘される。これによって、先に提示した事実は、かなり一般性の高いものであることをほぼ検証することができたと考える。また、蒲入方言と中村方言とを比較して、特に注目されることは、中村方言が話し手と相手との親疎関係とはほとんど関係なく、文の拍数がきわめて多くなっているという事実である。これは、日頃、当該方言の老年層話者が、いかに丁寧なあいさつ表現を交わしているかということ、を、如実に示すものである。おそらく、最も丁寧なあいさつ表現を行う方言の一つであると言ってよからう。

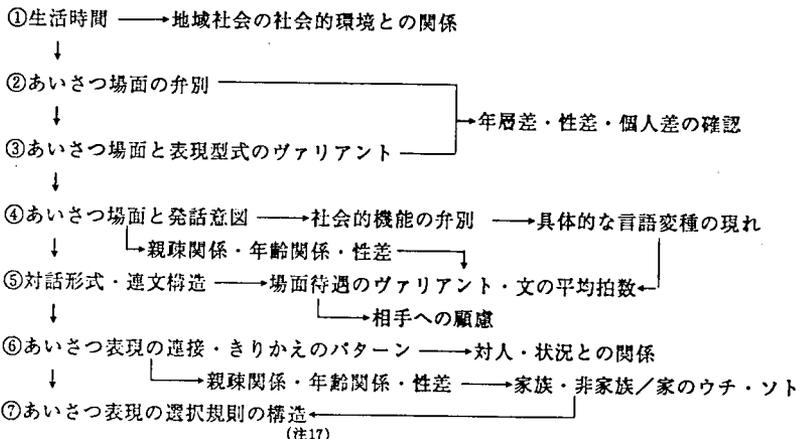
## 五 方言談話・方言行動におけるあいさつ表現行動の構造

従来の地域社会のあいさつ表現法の研究においては、それを構成する一々のあいさつ表現が「あいさつ文」表現として捉えられることが多く、「呼びかけ表現法」と「応答表現法」の双方に関わるものとして、両者の間に位置づけられはしていたが、文表現のレベルにおいて考察されることが少なくなかった。しかし、最初にも述べたように、あいさつ表現は、話し手と相手との間で交わされる緊密な対話構造・連文構造を基本とするものである。したがって、あいさつ表現は、方言談話の最小の単位体として、最も注目すべき存在とされる。

また、あいさつ表現の発話意図は、情報の授受とは本来無縁で、もっぱら地域社会における話し手と相手との関係認知や相互の人間関係の維持・推進という点におかれる。言い換えれば、相互にあいさつを交わすということが、土地の人間関係の円滑な営みにとってきわめて重要であり、そこに、あいさつ表現の社会的機能の基本を認めることができる。

このように考えるならば、今後、「あいさつ表現法」の研究においては、杉戸清樹氏が述べているように、「対人行動論的言語運用論」の観点から、「あいさつ表現行動の構造」を究明することが、<sup>(注16)</sup>重要な課題とされなければならないであろう。

次に示すものは、そのためのきわめて素朴な見取り図である。



(図1)

①から⑤までの分析作業は、⑥⑦の構造を帰納するための、いわば基礎的な役割を担うものである。⑥⑦の構造を規定する要因やそこに現れる多様な言語的変種の意味づけを正しく解析するためには、すべてのあいさつ場面に関する、表現形式・発話意図・連文構造・社会的機能と場面待遇のヴァリエーションとの相関性などについて、親疎関係・年齢関係・性差との具体的な関わりを分析、究明する①から⑤までの作業が、欠かせないものとして位置づけられることになる。

あいさつという場面において、あいさつ表現というコードを用いて行う言語行動の構造化やあいさつ表現の選択規則の構造化を試みることによって、あいさつ表現の生活(生19)を、人間関係と状況に基づいてより総合的に把握することが可能となるであろう。

## おわりに

従来の社会言語学で行われてきた研究では、一連のことばのやりとりから、ひとりの発話者の一回一回の言語行動を抽出して論じる場合が少なくなかった。この場合、対人行動を目的とすることばのやりとりの持つ相互性、共同性は、基本的には視野から外されていると言わねばならない。それに対して、筆者は、実際の言語場面の姿を、参加者の相互的なやりとりとして捉えなければならぬと考える。ことばのやりとりの姿を、最も単純な姿（一回的な談話行動として）で取り出すことができ、しかも多くの場面を含むあいさつ表現行動は、対人行動としての言語行動のモデルと規則性を解明するための重要な研究対象として、措定されるべきものとする。このような観点から、あいさつ表現体系の研究とあいさつ表現行動の研究とを統合した、より総合的な研究の実践が、筆者にとって今後の課題とされる。その際、特定の地域社会を対象とした個別研究に徹することが重要であることは、多言を要しないであろう。そこから、おのずと普遍への途が開かれるはずである。

## (注)

1. 杉戸清樹「言語行動というコトの研究に向けて」(『言語研究』第93号, 1988)
2. 広島大学方言研究会編『方言研究年報』第6巻(1963)
3. 藤原与一編『方言研究叢書』第6巻(1976, 三弥井書店)
4. 京都府奥丹後地方の一地について、あいさつ表現の体系的記述を行ったものとしては、拙論「京都府竹野郡丹後町間人方言のあいさつ表現法について」(『ノートルダム清心女子大学国文科紀要』第3号, 1969)がある。
5. 神鳥武彦編『日本語方言学——その課題と方法——』(1979, 東京堂出版)
6. 藤原与一著『方言学の方法』(1977, 大修館書店)
7. 小林祐子「あいさつ行動の日米比較研究」(『日本語学』第5巻第12号, 1986)
8. 「福島県岩瀬郡天栄村白子方言のあいさつことば」(『方言研究年報』第6巻, 1963)
9. 榎垣 実編『近畿方言の総合的研究』(1962, 三省堂)
10. 神部宏泰『隠岐方言の研究』(1978, 風間書房)
11. 注5に同じ。

12. 佐藤虎男「三重県鈴鹿市江島町方言のあいさつことば」(『方言研究年報』第6巻, 1963)
13. 真田信治「あいさつ言葉と方言——地域差と場面差——」(『日本語学』第4巻第8号, 1985)
14. 真田信治『地域言語の社会言語学的研究』(1990, 和泉書院)
15. 藤木 敦「島根県仁多郡横田町中村方言のあいさつことば」(『方言研究年報』第6巻, 1963)
16. 注1に同じ。
17. 注7に同じ。
18. 注1に同じ。
19. 井上史雄「シンポジウム『社会言語学の理論と方法』まとめ」(『言語研究』第93号, 1988)